

## 2015 年度 入学 試験 問題

# 国 語

(試験時間 13:15~14:15 60分)

1. 解答用紙は、記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。
2. 解答は、必ず解答欄に記入してください。なお、解答欄以外に書くと無効となりますので注意してください。
3. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。また、折りまげたり、汚したりしないでください。記述解答用紙の下敷きにマーク解答用紙を使用することは絶対にさけてください。
4. 解答用紙には、受験番号と氏名を必ず記入してください。
5. マーク解答用紙の受験番号および受験番号のマーク記入は、コンピュータ処理上非常に重要なので、誤記のないよう特に注意してください。
6. 満点が100点となる配点表示になっていますが、国文学専攻は150点となります。

一次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(50点)

或る日 雨の晴れま

路に竹の皮の包みが落ち

なから つくだにがこぼれ出た

つくだにの小魚は水たまりにつかったが

とうとう生きて返らなんだ

井伏鱒二の小説、『洋之助の気焰』(昭和九年)の冒頭に掲げられた詩なのだが、彼が得意としていたナンセンス・ユーモアの

(1) たるものがある。

そもそも小魚がへつくだにへでしかなかったことを知る哀しみとは一体何なのだろう。

われわれは現実世界のつましきに対抗するため、せめて想像力によって日常の事物を夢の世界に置きかえてみようとするのだが、それが (2) であったことに気づいたとき、結局「物」は一個の「物」にすぎないという、 (3) に復讐されて

しまうことになる。世界に働きかけるコトと、モノとしての現実世界と。この場合この両者を一個のかけちがいの感覚としていかにペーソスに塗り替えていくかに、方法としての「ナンセンス」の成否がかけられているらしい。

実は『洋之助の気焰』は井伏と太宰の『共作』であり、太宰が師匠の急場を救うために一部を代筆した小説なのだった。この時期、太宰は新進作家として劇的な変貌を遂げつつあったのだが、その陰には師から学び取った「ナンセンス」の精神が大きく介在していたのである。

ちなみに同じ年に太宰が発表した、『葉』の一節をあげてみることにしよう。

ある日、私が朝食の鱈を焼いていたら、庭のねこがものうげにないた。私も縁側へでて、にやあ、と言った。ねこは起きあがり、静かに私のほうへ歩いて来た。私は鱈を一尾なげてやった。ねこは逃げ腰をつかいながらもたべたのだ。私の胸は浪うった。わが恋は容れられたり。ねこの白い毛を撫でたく思い、庭へおりた。背中の毛にふれるや、ねこは、私の小指の腹を骨までかりりと噛みさいいた。

かけちがいの感覚、と言ったらよいのだろうか。あるいは片思いの感覚、とでも言ったらよいのだろうか。読み比べてみると、先の詩と外見以上の共通点が見えてくるようだ。こうしたディスコミュニケーションの創出はその後の太宰が最も得意としたところでもあるのだが、この場合、「ナンセンス」を徹底的に意識化された演技（ポーズ）にまで変奏していくところにそのオリジナリティがかけられていたように思われる。

一般にある人物がAという意味内容を主張し、もう一人がBという内容を主張してストレッチに終わったとき、そこから浮かび上がってくるのはAとB、それぞれの意味内容の対立なのであって、「かけちがい」に伴う悲哀やペーソスが前面に浮上することはありえない。それでは意思疎通にまつわる悲哀やペーソスのみを抽出し、強調するにはどうすればよいのか。内容をAでもBでもない、いわば意味そのものを空白、つまり「無意味（ナンセンス）」なものに置きかえてしまえばよいのではないか。仮にコミュニケーションを運搬にたとえるなら、運んでいるカバンの中身（具体的な意味内容）が空であることを知りつつ、なおかつ中身のある「ふり」をして運ばなければならなくなったとき、はじめて伝達そのものに由来するペーソスが浮かび上がってくることだろう。「ナンセンス」とは日常的なコミュニケーションに意図的に楔を打ち込み、世界に揺さぶりをかけていくための強力な手立てにほかならぬのだ。

一つの対象から何らかの価値を見いだしていく行為を「意味づけ」と命名するなら、「意味づけ」の対義語、つまり既成の価値観を無化し、解体していく行為を何と名付けたらよいのだろうか。仮に「意味はずし」<sup>(6)</sup>、とでも言ってみたらよいのだろうか。「意味づけ」をするのが小説の機能であるとすると同時に「意味はずし」をする機能もまた小説の重要な任務であるにちが

いない。

そもそも江戸戯作を中心に、近代以前の文学には何と豊富に「ナンセンス」の伝統が息づいていたことだろう。明治以降の文学の展開は、現実をリアルに写真しようとする疑似科学主義が浸透するのに反比例するように、非合理的な「嘘」や「出鱈目」が周縁に追いやられてきたプロセスでもあった。このように考えてみると、太宰治、高見順、織田作之助ら一連の作家に「新戯作派」という呼称が与えられたのはきわめて象徴的であるといわなければならぬ。彼ら二十世紀初頭のポスト・モダンズムの先駆者たちは、かつて江戸戯作に豊かに内包されていた「嘘」「出鱈目」「荒唐無稽」の役割を再発見し、「虚実皮膜」(近松門左衛門)、「つまり「嘘」と「真実」とのあわいを渡り歩くことを自らの身上とすることによって、「近代」を支配してきた価値観にカクンに戦いを挑んだのである。当初ひたすらマルクス主義的な世界観に沿って自己と世界との関係を「意味づけ」ようとしていた太宰が、今度は一転してナンセンスを標榜するようになるのも、科学的、合目的な世界観を内側から掘り崩していこうとしていたからにはかならない。

一般に小説に特定の意味や教訓を求めようとするわれわれの先入観は非常に根強いものがある。いわゆる「主題」、それも短いことばでカイクツできるようなそれが寓意として託されていなければ近代小説——少なくともすぐれた近代小説——とは言えないのではないか、といった強迫観念から、われわれはなお自由ではないのである。しかし実はそのような受け止め方そのものが、小説の長い享受の歴史にあつて、むしろ特殊なものだったのではないだろうか。

われわれは人生の役に立つ教訓を得るためだけに小説を読んでいるわけではない。フィクションは単にフィクション(絵空事)であつてよいはずだ。絶えず自らの行為に意味づけをしなければ生きていけないのが人の哀しい性であるとするなら、フィクションからアレゴリーを求めようとするこうした読み方自体を風刺し、笑い飛ばしてみせるのもまたフィクションの役割にほかならないのである。

たとえば太宰の『晩年』の中に『ロマネスク』(昭和九年)という短編が収められているが、その中にさらに「喧嘩次郎兵衛」という小編がある。舞台は江戸時代の東海道三島の宿。鹿間屋という造り酒屋の次男である次郎兵衛は、商人根性を嫌って毎日

酒を飲み、ならず者扱いされていた。やがて彼は二十二歳の夏に「喧嘩の上手」になることを決意する。そのきっかけは三島大社の祭りの日、近所の習字のお師匠の娘に傘を貸そうとし、ならず者たちから冷やかされたのがきっかけなのであったという。彼はまず酒で度胸をこしらえ、喧嘩のコウジョウを練習し、松林の中で毎日根株を拳で殴る練習をする。世の中は働かないものが貴いのだ、と確信し、日々松林の中で「おまえ、間違つてはいませんか」とコウジョウをつぶやき、枯れた根株をぽかりぽかりと殴つて回るのである。やがて修行が成つてみると、周囲は彼の貫禄と風貌におののき、誰も相手になる者がいなくなつてしまつていた。やがて習字のお師匠の娘を嫁にもらうのだが、戯れに喧嘩の強いところを見せようとしたところ、嫁はあつてなく命を落とすし、彼もまた入牢の憂き目を見るのだつた……。

以上、小説はなほ荒唐にして無稽な展開をたどるのだが、この小編は、まさしく荒唐無稽であるがゆえにこそ、小説から何か役に立つ教訓を導き出そうとするわれわれの先入観をはぐらかしてしまふ。結末で語り手は確かに「へものの上手の過ぎた罰」であるという教えを説くのだが、まさかこれをそのまま真面目な教訓として受け取る読者はいないだろう。このような教訓の示し方それ自体が、実は小説の「テーマ」なるもののあざやかなパロディになつてゐるのである。

もつとも「真面目」なテーマを揶揄してゐるはずのこの小説も、実は哀しい寓意を一つ背負つてしまつてゐる。すなわち「無意味」は常に「意味」の前に敗北するという哀しいテーマを……。

結末で次郎兵衛は牢の中で次のような歌を哀れな節で口ずさむのであるという。

岩に騒ぐ

頬をあらめつつ

おれは強いのだよ

岩は答えなかつた

彼のクワダ<sup>(11)</sup>てる荒唐無稽は、へび、すなわち日常現実世界からむなしくはねかえされてしまう。そしてまさしくこの連戦連敗<sup>(12)</sup>であるという一点において、「ナンセンス」は初めて「センス」に拮抗<sup>きつこう</sup>することができるのである。

(安藤宏『太宰治 弱さを演じるということ』による)

〔問一〕 空欄(1)には四字熟語が入る。二番目の字は「目」、三番目は「躍」である。一番目と四番目の漢字を答えなさい。

〔問二〕 傍線(4)(7)(8)(9)(11)のカタカナを漢字に改めなさい。(楷書で正確に書くこと)

〔問三〕 空欄(2)(3)に入れるのもっとも適当な語句の組み合わせを左の中から選び、符号で答えなさい。

- |   |              |           |
|---|--------------|-----------|
| A | (2) 一方的なほれ込み | (3) 冷たい視線 |
| B | (2) 過剰な思い入れ  | (3) 過酷な現実 |
| C | (2) 手前勝手な空想  | (3) 冷めた意識 |
| D | (2) 非現実的な見立て | (3) 厳しい世界 |
| E | (2) さびしさゆえの夢 | (3) 当然の事実 |

〔問四〕『洋之助の気焰』に掲げられた詩を筆者はどのような詩として理解しているか。もつとも適當なものを左の中から選び、

符号で答えなさい。

A つくだにが水につかれれば小魚に戻るかもしれないと思ったというばかげたことをあえて言うことで、現実の世界と相容れない自分の哀しみを表現する詩。

B つくだにを水に落としたとき、つくだにはもともと小魚だったことに改めて気づいたと言うことで、世界の見方は変わらうることを伝えようとする詩。

C つくだにが水につかっても小魚は生き返らなかつたとあえて言うことで、自分の思いはどうやっても相手に伝わらないという嘆きが浮かび上がってくる詩。

D つくだにを水たまりに落としたという哀しみを、小魚が生き返ることを期待したというありえない空想を言うことで、いつそう際立たせようとする詩。

E つくだにを水たまりに落としたが小魚は生き返らなかつたと当たり前のことを言うことで、取り返しのつかない哀しみがあることを暗示しようとする詩。

〔問五〕傍線(5)「伝達そのものに由来するペーソス」の説明としてもつとも適當なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 意思疎通ができたと思ったことが錯覚だったと知る哀しみ

B 意見の相違はどうしても完全にはなくせないという哀しみ

C 意思の疎通は一方通行であると知ったときに生じる哀しみ

D いかにも努力しても完全な意思疎通はできないという哀しみ

E 意味内容の無いことを伝えることはむなしという哀しみ

〔問六〕 傍線(6)「意味はずし」とあるが、筆者によれば、太宰がそれを用了のはなぜか。その理由にあたる箇所を本文中から三十字以上四十字以内で抜き出し、その最初と最後の五文字を答えなさい。(句読点、かつこ類も一字と数える)

〔問七〕 傍線(10)「このような教訓の示し方それ自体が、実は小説の「テーマ」なるものあざやかなパロディになっている」とあるが、筆者によれば、太宰は教訓を示すことで何をねらったのか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 小説の内容にそぐわない教訓をわざと示すことで、小説に教訓を求める読者の期待にこたえつつも、小説から読み取れる教訓は人によって異なることを気づかせようとした。

B 小説の内容から飛躍した教訓をあえて示すことで、小説に教訓を求める読者の期待にこたえる一方、作者は教訓を書くために小説を書くのではないことに気づかせようとした。

C 導き出せる教訓など何もない小説なのにあえてもってもらいたい教訓を示すことで、小説に教訓を求める読者がある程度満足させながら、そのおかしさに気づかせようとした。

D 小説の最後にあえてありふれた教訓を示すことで、小説に教訓を求める読者の期待を裏切り、小説に書かれている教訓はたいしたものではないことに気づかせようとした。

E とってつけたような教訓を示すことで、小説に教訓を求める読者の期待をはぐらかし、小説に教訓があるというのは単なる思い込みすぎないことに気づかせようとした。

〔問八〕 傍線(12)「連戦連敗であるという一点において、「ナンセンス」は初めて「センス」に拮抗することができるのである」の説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 「ナンセンス」は小説に教訓を読もうとする読者の意識を変えようとして常に失敗するが、その失敗が教訓となることで、教訓のある小説と同等となる。

B 「ナンセンス」は教訓のある小説より常に低く評価されるが、逆に言えば、荒唐無稽な小説として、教訓のある小説と同等の文学的な価値を見いだせる。

C 「ナンセンス」は確固とした世界の意味をはずそうとして常に失敗するが、その試み自体は世界を意味づけようとする小説と同等の価値があると言える。

D 「ナンセンス」は時代の価値観を覆そうとするが、それが強固で常に失敗するがゆえに面白さが生まれ、教訓のある小説と同じように読者をひきつける。

E 「ナンセンス」は読者の常識に亀裂を生じさせようとして常に失敗する少数派だが、少数派であることで常識的な多数派とは違う存在意義が生まれうる。

二 次 の 文 章 を 読 ん で 、 後 の 間 に 答 え な さ い 。 ( 30 点 )

ある人いはく、「<sup>(1)</sup>基俊は俊頼をば蚊虻の人とて、『さは言ふとも、駒の道行くにてこそあらめ』と言はれければ、俊頼は返り聞きて、『<sup>(2)</sup>文時・朝綱詠みたる秀歌なし。躬恒・貫之作りたる秀句なし』とぞのたまひける」。

またいはく、「<sup>(3)</sup>雲居寺の聖のもとにて、秋の暮れの心を、俊頼朝臣、明けぬともなほ秋風のおとづれて野辺のけしきよ面がはりすな

名を隠したりけれど、これを『<sup>(4)</sup>きよ』と心得て、基俊いどむ人にて、難じていはく、「いかにも歌は腰の句の末に、て文字据ゑつるに、はかばかしきことなし。障へていみじう聞きにくきものなり」と、口開かすべくもなく難ぜられければ、<sup>(5)</sup>俊頼はともかくも言はざりけり。その座に伊勢の君琳賢があたりけるなむ、『ことやうなる証歌こそ一つ覚え侍れ』と言ひ出でたりければ、『いでいで、うけたまはらむ。よもことよろしき歌にはあらじ』と言ふに、

桜散る木の下風は寒からで

と、<sup>(6)</sup>はてのて文字をながながとながめたるに、色真青になりて、ものも言はずうつふきたりける時に、俊頼朝臣はしのびに笑はれけり」。

(無名抄)による)

注 基俊……藤原基俊。 俊頼……源俊頼。 蚊虻……ここでは漢詩に暗いの意。

駒の道行くにてこそあらめ……老いた馬が道をよく覚えていようように、俊頼は経験によって何とか和歌を詠んでいるのだらうという皮肉。 文時・朝綱……高名な漢詩人。 躬恒・貫之……高名な歌人。 秀句……優れた漢詩。

雲居寺の聖のもとにて……雲居寺の僧贍西が催した歌合において。判者は基俊。 腰の句……第三句。

て文字……助詞の「て」または「で」。 障へて……つかえて。 ひっかかって。

伊勢の君琳賢……歌人にして僧。 証歌……ある和歌の表現が正当である根拠、証拠となる歌。

桜散る木の下風は寒からで……紀貫之の有名な秀歌。下句は「空に知られぬ雪ぞ降りける」。

はてのて文字……「寒からで」の「で」。 ながめたる……声を長くひいて歌を吟じた。

〔問一〕 傍線(1)(5)(7)の助動詞の説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A (1)(5)(7)はすべて尊敬の意味である。
- B (1)(5)は尊敬、(7)は受身の意味である。
- C (1)は受身、(5)(7)は自発の意味である。
- D (1)は受身、(5)は尊敬、(7)は自発の意味である。

〔問二〕 傍線(2)「文時・朝綱詠みたる秀歌なし。躬恒・貫之作りたる秀句なし」には、俊頼のどのような気持ちが込められているか。もつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 優れた漢詩人でもよい和歌は詠めない。優れた歌人でもよい漢詩は作れない。だから、漢詩に暗い私が和歌が下手でも、おかしいことではない。

B 優れた漢詩人でもよい和歌は詠めない。優れた歌人でもよい漢詩は作れない。だから、漢詩に暗い私が和歌が上手くても、おかしいことではない。

C 優れた漢詩人でもよい和歌は詠めない。優れた歌人でもよい漢詩は作れない。だから、和歌に明るい私が漢詩が上手くても、おかしいことではない。

D 優れた漢詩人でもよい和歌は詠めない。優れた歌人でもよい漢詩は作れない。だが、私は無学なので漢詩も和歌も下手なのだ。

E 優れた漢詩人でもよい和歌は詠めない。優れた歌人でもよい漢詩は作れない。だが、私は天才なので漢詩も和歌も上手いのだ。

〔問三〕 傍線(3)「明けぬとも」の説明としてもつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 秋の最後の夜がなかなか明けず、冬にならなくとも。

B 夏の最後の夜がなかなか明けず、秋の夕暮れが来なくとも。

C 秋の最後の夜がなかなか明けず、夕暮れのようにあっても。

D 夏の最後の夜が明けてしまつて、秋の夕暮れになつても。

E 秋の最後の夜が明けてしまつて、冬になつても。

〔問四〕 傍線(4)「さよ」が指している内容を、十五字以内で簡潔に書きなさい。(句読点も一字に数える)

〔問五〕 傍線(6)「ながながとながめたる」という行為に込められた心情として不適当なものを左の中からひとつ選び、符号で答え

なさい。

A 敵意

B 揶揄やげう

C 同情

D 嘲笑たわぶり

E 皮肉

〔問六〕 次のア～オのうち、本文の内容と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

A 基俊は俊頼の歌を、人が反駁さかすできないほど手厳しく非難したので、俊頼は何も言わずにいた。

I 琳賢は、思いついた証歌に自信をもっていたが、たいした歌ではなさそうな口ふりをした。

ウ 基俊は内心、すばらしい証歌が提示されたらどうしようかと、びくびくしていた。

エ 琳賢は紀貫之の歌によって、基俊の自尊心をへし折ることに成功した。

オ 基俊は頑固に、「桜散る」の歌を秀歌だとは認めなかった。

三 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(設問の都合上、返り点・送り仮名を省いた箇所がある) (20点)

家庭之教又必原於朝廷之教。朝廷之教以(1)則家庭之教

亦以道德。朝廷之教以名利、則家庭之教亦以名利。嘗有友人問、建

文時何多忠義。予曰、此父兄之教嚴耳。友人問、何以知之。曰、以朝廷

之教知之。蓋當時朝廷之教甚嚴。其子弟苟或居官而不肖、則累及父

母、累及宗族。故孩提之時苟或不肖、則其父兄必變色而訓之。語曰、

少成若天性、習慣如自然。積累既深、所以居官之時、雖九死而靡悔

也。

(陸世儀「思弁錄」による)

注 名利……名譽と利益。 建文……明の年号。 宗族……一族。 孩提……幼児。 変色……怒りのあまり表情を

変えること。 累……巻き添え。 語……ことわざ。 少成……幼少期に培われた性質。 積累……積み重ね。

〔問一〕 空欄(1)に入る語としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 道徳      B 名利      C 忠義      D 不肖      E 自然

〔問二〕 傍線(2)「嘗」の読みを、送り仮名も含めて平仮名で書きなさい。(平仮名以外に何も書かないこと)

〔問三〕 傍線(3)「以朝廷之教知之。」の解釈としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 朝廷の教えによって、このことを始めた。  
B 朝廷が教えたら、このことが徹底される。  
C 朝廷の教えによって、このことがわかる。  
D 朝廷が教えたら、このことが理解される。  
E 朝廷の教えによって、これが周知される。

〔問四〕 傍線(4)「所以居官之時、雖九死而靡悔也」は、「くわんにをるのとき、きうしすといへどもくいなきゆゑんなり」と読む。これに従って、「靡」字の下に付く返り点を書きなさい。(返り点以外に何も書かないこと)

〔問五〕

本文の内容に合致するものを左の中からひとつ選び、符号で答えなさい。

- A 朝廷の教えも家庭の教えも、名利を重んじるような方向は望ましくない。
- B 昔の朝廷は、家庭における教えを厳格に行うように、国民を教え導いた。
- C 厳格な教えの結果、国民が不安なく生活できるならば、国家は安定する。
- D 朝廷の教えのありかたは、家庭における教えに対して、強い関係がある。
- E 朝廷の教えは、家庭における教えよりも大きい影響力を持つことはない。